

【おわりに】

「出羽三山 七大御秘所考」の終わりに当たっての感想です。

その1；正善院のこと

2021(R3)年6月1日(火)～6月2日(水)、正善院の島津代表および長南副住職と懇談する機会がありました。山伏修行・修験道あつての手向地区、出羽三山です、その中にあって、羽黒山修験本宗として秋の峰入り修行については古式を継承しています。また遡れば、明治の神仏分離においては、多くの仏像・仏具が廃棄され散逸する混乱の中でも、最も象徴的な秘仏とされた出羽三山大権現、羽黒山三所権現などの重要なものを引き受けて、今日も大事に保管している姿勢に敬意を表したく思っています。

その2；出羽三山神社のこと

同神社監修「出羽三山史」の内容、近年の様々なイベントに係る宮司の挨拶、同社歴史博物館の展示物などに触れるにつき、仏教色を直接的に排除するような言動はなく、むしろ包摂の動きが感じられます。とてもうれしいことです。日本人は、古来の神祇信仰と伝来した仏教・道教などを上手に習合・混淆して来た大和民族です、心の中に神と仏の明確な峻別の線を引いてはいません。現代の多様化した社会にあっては、神社神道のみに頼る姿勢では人は関心を示しません。出羽三山の歴史を観光資源とみるならば、なおさらのことです。^{しんぶつ＝かみ・ほとけ}神 仏 の分離・分別を乗り越えた^{した}強かさが必要だと思っています。

さて、明治元(1868)年3月28日、維新政府は神仏混淆を禁止し、寺院色と神社色を分離するように命じる神仏判然令を出しました。しかし、羽黒においては千年来の伝統を一片の政令で改めること出来ずになかなか実行されませんでした。明治6年3月15日伊万里県(現佐賀県の一部)より赴任した西川^{すが お}須賀雄宮司(平田篤胤^{あつたね}派国学者)は、業を煮やして徹底した廃仏、すなわち神勤の徹底――還俗していた旧僧侶を解任、登拝道沿いの石仏の破壊、道沿いの道者小屋の閉鎖などを図りました。

この期前後の神道側と仏教側での様々な軋轢の歴史を踏まえて今日に至っていますが、私は次の2点に同調し感慨を深くするものであります。

✓1；前出、出羽三山神社監修「出羽三山史(平成二十三年三月一日 十版発行)」から転載します。

――羽黒におけるこの神仏分離は数百千年来の信仰慣習であったから、西川宮司の説諭も誠に容易でなかった事はうなずかれる事であるが、改変の急なる余り、仏像や仏具の破壊が行われたのは誠に残念と言わなければならない。――

この謙虚な反省の言葉が印象的です。

✓2；「出羽三山(岩鼻通明著)」から転載します。

――1970(昭和45)年には、羽黒山頂に近代的な羽黒歴史博物館が開館し、出羽三山ゆかりの文化財を展示する場が整備された。平成7(1995)年には、戸川安章の指導と監修のもと、山頂の博物館を補う役割を果たすべく「いでは文化記念館」が開館した。とりわけ、神道・仏教にかかわらず幅広く文化財を展示するなど、神道側と仏教側の橋渡しを実践している意義は大きい。――

私もまったく同感です。今後ともこのような意識を強く持って、両者の接着剂的な存在であって欲しいと願っています。

他方で、現在においては、神社側の諸々の発信が多く目立ち、仏教側の知名度という見劣りは否めません。今様における教義や組織論理からすれば当然一^{いつ}になることは出来ませんが、いでは文化記念館からは、両者の歴史面の功績に関しては同等に扱って情報発信に努めて欲しいものです。

=====

最終段に来て、思い残しのようなものがふと湧き上がりました。月山八合目から下った御浜池行きです、御浜池は聖地・秘所東補陀落と一体の場所と言われます。

前記のとおり、2017(H29)年8月26日(土)③東^{ふだらく}補陀落（ひとり参詣^{とそう}抖藪）行きの際にチャンスはあったのですが、御浜池分岐で14時30分を過ぎており、約片道1km、標高差150mを往復するには、写真撮影等の滞在時間を含めると2時間近く掛ることからこの時は断念することにしました。しかし、いつか実現したいと思っています。

=====

《 追 記 》

長年に渡って懸案であった前記御浜池参詣が叶いました。

別記のとおり、2022(R4)年7月10日(日)、立谷沢川支流にぎり沢経由で（仮称）御浜池古道を実査して来ました。

「出羽三山七大御秘所考『神秘の解剖実査』」と銘打って取り組んで来ましたが、その7個所について、その場所全部の核心部に行くという命題を自分に課して取り組んで来たものです。いずれにしても実査して来ました、率直に、自己満足でうれしく思っています。

(完)